

複合的資源管理型漁業促進対策事業(抄録)

齋浦 耕二・岡崎 孝博・一ノ 宮誠・天真 正勝

播磨灘，紀伊水道，太平洋の3つの海域に分け，各海域の漁業実態に即した「資源管理型漁業」を推進するための調査を行った。

調査結果の詳細は平成10年度複合的資源管理型漁業促進対策事業報告書を参考にされたい。

播磨灘地域

主要漁協の漁獲統計資料を基に，平成6～10年の漁法毎に単位努力量あたり漁獲量の推移を調べた結果，マダイ，マコガレイ，メイタガレイ，ヒラメ，クルマエビ，ガザミについては多少変動があるものの全体的にはほぼ横這い，アナゴ，サワラでは，減少傾向にあり，資源水準の低下が考えられる。

小型底曳網漁業の操業形態について，6経営体を調査した結果，使用される底曳網の目合いは，7～8節，9～10節，14節の順で，1回出漁あたりの曳網回数は，6回，5回，4回の順で多かった。年間の出漁回数は66～138回(平均103回)，板びきの1回曳網あたりの操業時間は60～90分であった。水揚げされた漁獲物の出荷については漁協を通しながらも特定の仲買人に依存している。

北泊漁協に水揚げされた小型エビ類(サルエビ，アカエビ)の体長測定を平成10年7月8日～同年9月9日に実施した。最小水揚げサイズは体長49mmで，水揚げの中心サイズは体長60～90mmであった。

魚捕り部にカバーネットを装着した底曳網(目合い8節，10節，12節，14節)を使って平成10年9月1日に網目選択性試験を実施した結果，夏季におけるサルエビの漁獲については，底曳網の目合い12節では水揚げサイズよりも小さい個体の船上からの投棄割合が比較的高く，更に目合いを拡大することでサルエビ資源を有効に利用できると考えられる。また，少なくとも目合いを8節以上に拡大するとサルエビの漁獲はほとんど無いと考えられる。

紀伊水道地域

瀬戸内海機船船びき網漁業の現在の県内許可数は74統であり，同漁業の海上作業従事者数は，379名で平均年齢は49.9才である。

聞き取り調査から営漁形態は，もっぱらシラスを漁獲対象としてチリメンまでの自家加工を行うタイプと自家加工を行わないタイプおよびシラス以上のカエリ，小羽，中羽を主に漁獲対象するタイプの3つに分類される。

シラスを漁獲対象とする際に使用するパッチ網後端部の袋網は、現在目合い 260 経のモジ網が使用されている。220, 240, 260 経のモジ網の目合いは、1.92mm, 1.73mm, 1.58mm である。それぞれの網目の対角線長に相当する体高をもつカタクチイワシの全長(体重)は 25.7mm(50mg), 23.9mm(37mg), 22.5mm(30mg)である。

最近 10 年間で 260 経のモジ網を使用したパッチ網で漁獲されたカタクチイワシシラスの全長組成は、22~23mm の大きさの漁獲比率がもっとも高くなっていた。

太平洋地域

牟岐地区をモデル地区として、イセエビについて資源動向の現状把握を行った。当地区において漁獲されたイセエビの雌雄別頭胸甲長を測定し、漁獲サイズ組成を求めた。過年度測定結果と比較したところ、オスについて大型個体の含まれる割合の減少がみられた。

また、漁獲対象とならない稚エビの移動、分布及び成長等を把握するため、平成 11 年 2 月から 3 月の間に延べ 1088 個体について標識放流を行った。平成 11 年 3 月 24 日現在までに 86 個体が再捕され、再捕率は 7.9%となった。再捕場所については放流後、まだ間もないことから全個体が放流地区である牟岐地区漁場で漁獲された。